

高校生の大学選択に関する追跡研究

岩田 弘三*

4年制大学—短期大学, 国公立大学—私立大学, 学部系統(内容が似ていると思われる学部群), についての選択は, 大学選択の重要な要素になっていると考えられる。本論文は, これらの点に関する高校生の大学選択の形成過程に焦点を当てた事例研究である。

従来の大学選択に関する研究の多くは, 第1に, (各学年ごとに違う集団をとる) 横断的データをもとになされてきた。従って, 個々の生徒の大学選択の変遷過程までは扱え切れなかった。第2に, これらの研究では, 学業成績との関連をみる場合には, 全体的な(総点主義的な)学力の水準を問題にしてきた。しかし, 本質的に一元的な優劣付けが不可能な学部系統の選択は, 全体的学力によっては捉え切れない。そこで本論文では, A高校の生徒の高校2~3年次に関する追跡データを用いて, 経時的な志望の揺れを追跡するとともに, 学力に関しては全体的学力ではなく, 個々の教科成績に注目することにした。

本論文で得られた主な知見は以下のとおりである。なお, これはあくまで一高校に関する知見であり, 一般化するにはさらなるデータの蓄積が必要であることを断っておく。

(1) 第1志望と第2志望に同じ学部系統(8分類)を志望した生徒の割合は, 高校2~3年, 国公立大学出願時のいずれの時点をとっても, 常に3/4以上に達する。

(2) A高校のコース分けが2年生進級時点で行われていることもあり, 大多数の生徒は, 履修コースとともに, 高校2~3年生をとおして文系—理系の志望は一貫している。

(3) 志望先変更者に関しては, 文系コース履修者には, 途中で一時的に志望が理系に揺れる生徒が多い。このような文系—理系の志望の揺れは, 第1に短大志望, 第2に家政・教育系学部志望によって起こっている。これら入試教科からみると文系—理系の区分が曖昧な学部志望を除けば, 純粋な理系学部への揺れを示す生徒は極めて少ない。

(4) 理系コース履修者では, 途中で文系志望へ転向する生徒が多い。文系転向者の多くは, 入試において数学でも勝負できる経済系学部, 家政・教育系学部への志望者である。

(5) 5教科をまんべんなく学習させるという学習指導の効果もあって, A高校では, 一般的に言われる国公立大学志願者=5教科型, 私立大学・短大専願者=3教科型, という傾向はみられなかった。しかし, 私立大学・短大専願者は国公立大学受験者に比べて, 全教科の成績が低かった。

* 大学入試センター研究開発部 評価・追跡部門
 大学入試センター研究紀要 No.21, 1992, p.81~106 (平成3年12月9日受付)
 ©1992 THE NATIONAL CENTER FOR UNIVERSITY ENTRANCE EXAMINATION

1. はじめに——大学選択に関する分析の視点

大学選択を行う際に、受験生は、内容が似ていると思われる学部群(学部系統)をイメージする。そして、この学部系統は大学選択の大きな要素の一つとなっている⁽¹⁾。同様に、4年制大学—短期大学、国公立大学—私立大学間の選択も、大学選択の中では大きな比重を占めていると考えられる。それでは、これらに関する大学選択はどのようにしてなされるのであろうか。今回は、この点を学力との関係を含めて追跡的にみることにした。

以上の点に関する大学選択の研究は、これまで数多くなされてきた。しかし、それらの研究の多くは横断的なデータにもとづくものであった。従って、個々の生徒が経時的にどのような大学選択の揺れを示すのか、といった点については明らかにしえなかった。個々の生徒が、どのような変遷を経て最終的な大学選択を行うのか、その形成過程を明らかにすることが、本稿の第1の視点である。

本稿の第2の視点は、大学選択と学力との関係を明らかにすることにある。これについては、以下少しスペースを割いて論じることにする。大学選択を含む進路に関する研究の中で、進路と学業成績との関係を扱った研究も、これまで多くの蓄積がなされてきた。それらの研究は、高等教育進学と就職、4年制大学進学と短期大学・専門学校進学、国(公)立大学進学と私立大学進学、などといった進路選択の分化に学業成績がいかに効いているかを明らかにしてきた。しかし、それらの研究の多くで用いられている学業成績は、個々の教科ごとではなく、全体的な(あるいは総点、合計点主義的な)学力の水準であった。そこでは仮に個々の教科成績が問題にされても、進路選択、あるいは全体的な学力に対する、各

教科成績の寄与のウェイトが主要関心になっていた⁽²⁾。つまり、進路選択や、全体的な学力をもとにした個々の生徒のポジションを考える上で、学校の中で、あるいは生徒の意識として、どの教科が相対的に重視されているかに、問題の関心が集中していた。

確かに、全体的な学力は以下の文脈では強力な意味をもつ。選択された進路にランク付けが前提される場合(例えば、就職と進学、あるいは高等教育機関内の序列等)、またはそのランクのあり方自体を問題にする場合である。例えば、荻谷剛彦のつぎの結論はこの点をよく表している。「主に試験という方法に依拠したわが国の教育選抜は、選抜基準としての学業成績の重要性をほとんど絶対的なものとし、……しかもそれを『総合的に』一次元化して選抜の基準に用いることが一般化している。……この明瞭な基準にもとづく序列の中で生徒の占める相対的な位置が、彼らの将来の成功を予示する基準とみなされるのである。」⁽³⁾

しかし、大学選択の一部である学部系統の選択は、このような縦の次元では捉え切れない。なぜなら、学部系統の優劣を設定することは、本質的には不可能だからである。さらにこれは、仮に各教科・科目の学力と、それらの合計である「総合的」・全体的学力との間に高い相関がみられる、即ち学力構造には一次元的傾向が強い⁽⁴⁾、としても同様である。なぜなら、同じ学力レベルにある生徒集団内の学部系統選択を説明できないからである。

それでは、学力との関係で学部系統の選択を問題にする時には、いかなる視点が可能なのであろうか。以下、まず学部系統を一旦離れて、個々の大学学部(あるいは学科)を例に考えてみよう。

個々の受験生の各高校教科・科目の出来・不出来のパターンを、ここでは学力パターン

と呼ぶことにする。例えば、国語と社会の学力は高いが、数学と理科の出来はよくない受験生がいる。また、その逆のパターンを示す受験生も存在する。言い換えれば、学力パターンとは、このような受験生個人の教科・科目に関する学力プロフィールのことである。大学選択は一面では、この学力パターンを媒介にした、大学の入学方針と受験生とのマッチング・プロセスと捉えられる。

即ち、一方で、様々な学力パターンをもった受験生が存在する。他方、個々の大学学部は、入学試験で課す教科やその配点によって、どのような学力パターンを持つ学生の入学を望んでいるかを、明示していると考えられる(入学方針)。受験生は、そのようにして示された大学学部が重視する教科と、自己の学力パターンとを見合わせて、志望学部・学科を選択する。その場合、大学学部が重視する教科を重点的に勉強し、自分の学力パターンを、志望学部・学科が望むものへと変化させていくこともある。いずれにしろ、大学の入学方針と、集まってくる志願者、合格者の学力パターンとの間には、強い相関があることが確かめられている⁽⁵⁾。つまり、一面では、大学入試を媒介にした、大学と高校との接続関係(articulation)は、学力パターンを中心になされていると考えられる。

上でいう学力パターンとは、高校での学力をもとにしたものである。従って、専門教育の場である大学の立場(入学方針)からいえば、これは専門教育を受けるために必要な基礎学力のあり方と定義される。学部系統とは、この専門教育の内容の異同をも内に反映した分類概念である。このため、同じ学部系統内の入学方針は必然的に相似したものになる。個々の大学・学部のユニークさによって、入学方針には幾分偏差があるにしても、これは大枠の範囲内のことである。従って大枠では、

上記の学力パターンを媒介にしたマッチング・プロセスは、学部系統選択を考える上でも適応可能である。

以上は、学部系統の選択に関して論じてきた。同様のことは、4年制大学—短期大学、国公立大学—私立大学間の選択に関しても当てはまる部分がある。国公立(4年制)大学の入試は多くの場合、共通1次(大学入試センター試験)で5教科受験を義務づけている。これに対し、一般的に、私立大学や短期大学の入試は、文系学部では国語、社会、外国語を、理系学部では理科、数学、外国語の3教科を中心に行われている。従って、私立大学や短大を専願することに決めた受験生は、3教科中心の勉強に励み、他の2教科はいわゆる「捨て」教科として、勉強がおろそかになっている可能性があるとの指摘は、巷間でよくなされるところである。このように考えると、私立大学や短期大学志願者の全体的学力が低いのは、「捨て」教科による可能性もある。即ち、私立大学や短期大学志願者は、特定の教科については、国公立(4年制)大学志願者と同等以上に、成績が高いことも考えられる。

今回は高校生の側からみた大学選択が中心テーマである。従って、入学方針の詳しい解析は別の機会に譲るとして、マッチング・プロセス上の高校生の対応に焦点を当てた。ここでは、合計点主義的な学力ではなく、学力パターンを中心にして、各教科ごとの学力を問題にした。

以上の問題意識にそくして今回は、(a) 4年制大学—短期大学、および国公立大学—私立大学、(b) 学部系統、の2つを軸にして、高校生が第1志望と第2志望に選んだ大学・学部に関する分析を行うことにした。そこでは、まず、(1) 基礎資料として、各サンプル時点での志望状況を押さえ、つぎに、(2) 4つのサンプル時点をとおしてのその時間的変遷を

み、最後に、(3) 学力パターンとの関連を明らかにする。

2. データの内容とA高校のプロフィール

データの中身とA高校のプロフィールについては、既に別論文に詳しいので、ここでは今回の分析に密接に関わる部分だけを、以下簡単に紹介しておく⁽⁶⁾。

今回用いるデータは、A高校の昭和63年度卒業生が2年生7月、2年生1月、3年生6月、3年生10月の4時点で参加した、大手予備校の校外模試のデータである。この4回の試験を全て受験した生徒は、この学年全体の約9割(424人)であった。

このデータには、以下の情報が含まれている。① 文系—理系の履修コース、② 第1、第2志望として申請した大学・学部・学科名、③ 5教科6科目の模擬試験成績(国語、数学、外国語を共通科目として、文系学部志望者は社会2科目、理科1科目選択、理系学部志望者は社会1科目、理科2科目選択)。この成績は素点ではなく、全国の模擬試験受験者を基礎に偏差値換算した成績である。

つぎに、A高校のプロフィールを紹介しておく。A高校は、明治以来の歴史をもった県立高校である。その設置場所は、県庁所在地であるB市郊外の田園的環境の中にある。A高校が所在するC県では、他の地方県同様、私立大学進学に対して、国公立大学進学を高く評価する傾向が一般的にみられる。このようなC県の中であって、A高校は、最近の進学実績からみると、県下ではトップ校の次にくる、いわゆる2番手校である。4年制大学現役進学率は4~5割であり、就職者は10名に満たない。カリキュラムとの関連では、この高校は、国公立大学受験向きの編成方針を

採っている。また、2年生に上がる段階での文系—理系のコース分けを行っている。文系コースの選択者は、男子生徒の約85人(35%)、女子生徒の約180人(85%)、全体では約265人(55%)となる。

今回の分析は、A高校に関するケース・スタディである。従って、今回得られた知見は、以上のような特性等による制約を受けるものである。従って、今回の知見を一般化するには、さらなるケースの追加が必要である。

3. 志望大学の組み合わせ

A高校の生徒は、どのような大学・学部・学科を、第1、第2志望として選択したのだろうか。まず最初に、かれらの志望が4年制大学であったのか短大であったのか、4年制大学であれば、それが国公立大学であったのか私立大学であったのか、についてみていこう(短大志望者はその数が少なかったので、国公立、私立の別は問わないことにした)。表1は、この点に関して、第1志望大学と第2志望大学の組み合わせパターンをみたものである。

第1志望、第2志望に国公立大学しか記入しなかった生徒(第1志望、第2志望ともに国公立4年制大学を記入したか、第2志望は記入しなかったが第1志望に国公立4年制大学を記入した生徒)は、どのサンプル時点でも、文系コース履修者全体の70~85%、理系コース履修者全体の94%以上を占める。さらに、第1志望に限ってみれば、文系コース履修者の85~92%の生徒が、理系コース履修者にいたっては97%以上の生徒が、国公立4年制大学を記入している。加えて、A高校においては、私立4年制大学専願者がいない。つまり、A高校においては、国公立4年制大学志向が極めて強いことが分かる。ただし、実

表1 志望大学（4年制，短大別・設置者別）の組み合わせ

(1) 文系コース履修者

第1志望	第2志望	2年生 7月時点	2年生 1月時点	3年生 6月時点	3年生 10月時点
国公立	国公立	160 (67.0)	198 (80.8)	207 (84.8)	187 (76.6)
国公立	—	7 (2.9)	-	-	-
国公立	私立	23 (9.6)	12 (4.9)	2 (0.8)	11 (4.5)
国公立	短大	21 (8.8)	17 (6.9)	7 (2.9)	6 (2.5)
私立	私立	4 (1.7)	3 (1.2)	5 (2.1)	8 (3.3)
私立	—	1 (0.4)	-	1 (0.4)	1 (0.4)
私立	短大	3 (1.3)	-	1 (0.4)	2 (0.8)
私立	国公立	-	-	1 (0.4)	-
短大	短大	14 (5.9)	13 (5.3)	18 (7.4)	25 (10.3)
短大	—	4 (1.7)	1 (0.4)	1 (0.4)	2 (0.8)
短大	私立	1 (0.4)	1 (0.4)	1 (0.4)	2 (0.8)
短大	国公立	1 (0.4)	-	-	-
計		239(100.0)	245(100.0)	244(100.0)	244(100.0)

(2) 理系コース履修者

第1志望	第2志望	2年生 7月時点	2年生 1月時点	3年生 6月時点	3年生 10月時点
国公立	国公立	177 (94.2)	178 (93.7)	189 (99.5)	183 (96.3)
国公立	—	4 (2.1)	2 (1.1)	-	1 (0.5)
国公立	私立	5 (2.7)	5 (2.6)	-	2 (1.1)
国公立	短大	1 (0.5)	3 (1.6)	1 (0.5)	-
私立	私立	-	-	-	4 (2.1)
私立	—	-	1 (0.5)	-	-
私立	短大	-	-	-	-
私立	国公立	-	1 (0.5)	-	-
短大	短大	1 (0.5)	-	-	-
計		188(100.0)	190(100.0)	190(100.0)	190(100.0)

際に国公立4年制大学に出願した生徒は、文系コース履修者の56.3%（236人中133名）、理系コース履修者の76.1%（188人中143名）である（母数は、4サンプル時点全てについて志望が分かっている生徒）。さらに、このうち国公立4年制大学に現役で合格した生徒は、文系コース履修者で36人、理系コース履修者で53人となる。

以上は、各時点ごとの静態的な志望の組み合わせである。つぎに、4サンプル時点をとおしての志望の組み合わせの変化を調べてみた。（サンプル数は、先に示したように、文系

コース履修者で236人、理系コース履修者で188人。）4サンプル時点をとおして、第1志望、第2志望に国公立4年制大学しか記入しなかった生徒は、文系コース履修者で132人（55.9%）、理系コース履修者で166人（87.8%）となる。（このうち実際の国公立4年制大学出願者は、それぞれ100名、129名である。）他に、4サンプル時点をとおして、第1志望、第2志望に短期大学しか記入しなかった生徒として、文系コース履修者3名がいる。また、1名の文系コース履修者は、国公立4年制大学と私立4年制大学の組み合わせをとおしてい

表2 志望学部系統の組み合わせ (2年生7月時点)

		第2志望学部系統							
		文科系	文理総合系	理学・農学系	工学系	医歯薬系	短大	記入なし	計
第1志望学部系統	文科系	106 23.4	15 3.3	1 0.2	1 0.2	—	6 1.3	4 0.9	133 29.4
	文系 文理総合	17 3.8	74 16.3	—	—	—	19 4.2	8 1.8	118 26.1
	理系 文理総合	1 0.2	6 1.3	3 0.7	2 0.4	—	—	—	12 2.7
	理学・農学系	2 0.4	7 1.6	15 3.3	11 2.4	2 0.4	—	—	37 8.2
	工学系	3 0.7	4 0.9	8 1.8	95 21.0	—	—	1 0.2	111 24.5
	医歯薬系	—	2 0.4	4 0.9	1 0.2	10 2.2	1 0.2	2 0.4	20 4.4
	文系短大	1 0.2	2 0.4	—	—	—	10 2.2	4 0.9	17 3.8
	理系短大	—	—	—	—	—	5 1.1	—	5 1.1
	計	130 28.7	110 24.3	31 6.8	110 24.3	12 2.7	41 9.1	19 4.2	453 100.0

上段 実数、
下段 比率(%)。
(表3, 表4, についても同様。)

る。その他の組み合わせは全て、いずれかの時点で変更がみられる。特に、文系コース履修の女子生徒の場合、18.1%(116人中21名)の生徒が、一度は4年制大学と短期大学との狭間で志望が揺れている。

4. 志望学部系統の一致

つぎに、各時点でのA高校の生徒の、第1志望学部系統と第2志望学部系統の組み合わせのパターンを押さえておく。これについて、データのある4時点のうち、2年生7月時点と3年生10月時点での組み合わせパターン

をみたのが、表2と表3である(後述する点を除けば、2年生1月時点と3年生6月時点の、第1志望と第2志望の組み合わせパターンに、表2, 表3との目立った差異は認められなかったもので、これらに関する表は割愛した)。

池田・鈴木・前川は、共通1次のデータを用い、受験機会複数化開始年(昭和62年度)の、受験生の国公立大学学部の併願パターンをもとに、5つの学部系統(文科系, 文理総合系, 理学・農学系, 工学系, 医歯薬系)を抽出した⁽⁷⁾。今回の学部系統は、基本的にはそこで提出された分類をもとにしている。私立大

表3 志望学部系統の組み合わせ（3年生10月時点）

		第2志望学部系統						
		文科系	文理総合系	理学・農学系	工学系	医歯薬系	短大	記入なし
第1志望学部系統	文科系	107 23.7	11 2.4	—	3 0.7	—	3 0.7	—
	文系 文理総合	24 5.3	111 24.6	2 0.4	—	—	3 0.7	2 0.4
	理系 文理総合	1 0.2	9 2.0	1 0.2	1 0.2	—	2 0.4	—
	理学・農学系	3 0.7	3 0.7	18 4.0	2 0.4	—	—	—
	工学系	2 0.4	2 0.4	4 0.9	94 20.8	—	—	—
	医歯薬系	—	2 0.4	2 0.4	1 0.2	8 1.8	—	—
	文系短大	—	—	—	—	—	18 4.0	1 0.2
	理系短大	2 0.4	—	—	—	—	8 1.8	2 0.4
計		139 30.8	138 30.5	27 6.0	101 22.4	8 1.8	34 7.5	5 1.1

学の学部についても国公立大学学部の分類に準拠させた。ただし、ここで用いる学部系統分類には以下のカテゴリーを付加してある。

(1) 共通1次のデータでは、受験生がいずれの学部志願したかは分かるが、どの学科に志願したかまでは知りえない。従って、このようなデータの制約などの理由で、池田等の分析では、文系、理系両方の学科を含む学部は、文理総合系のカテゴリーに一括されている（大半は教員養成系学部）。今回のA高校データでは、第1志望学部・学科の文系、理系の区分が分かるので、第1志望学部に関しては、文理総合系をさらに文系と理系に区分した。

(2) 4年制国公立大学志願者をサンプルと

した池田等の分類にはケース自体が含まれなかった短期大学を、文系短大と理系短大に分け、新たにカテゴリーとして加えた。

第1志望と第2志望の学部系統が一致している生徒を、ここでは志望学部系統一致者と呼ぶことにしよう。ただし、第1志望が文系もしくは理系の文理総合系で、かつ第2志望が文理総合系の生徒は、一致者の中に含むことにした。短大についても同様である。

2年生7月時点で、第1志望および第2志望、両方の大学・学部を申告した生徒は、計434人いた。このうちの学部系統一致者の比率は74.0%（321名）になる。これが2年生の1月時点には74.5%（454人中338名）に、3年生6月時点には80.9%（446人中361名）

表 4 国立大学の志望学部系統の実際の併願パターン (国公立大学志願者)

	文科系	文理 総合系	理学・ 農学系	工学系	医歯薬 系	単願者	計
文科系	63 21.6	4 1.4	—	—	—	24 8.2	91 31.2
文理 総合系	11 3.8	69 23.6	4 1.4	—	—	29 9.9	113 38.7
理学・ 農学系	2 0.7	3 1.0	12 4.1	4 1.4	3 1.0	3 1.0	27 9.3
工学系	—	1 0.3	9 3.1	41 14.0	—	5 1.7	56 19.2
医歯薬系	—	1 0.3	—	2 0.7	1 0.3	1 0.3	5 1.7
計	76 26.0	78 26.7	25 8.6	47 16.1	4 1.4	62 21.2	292 100.0

に、3年生10月時点には83.4%(447人中373名)になっている。このように、月日を経るにつれて、一致者の比率は増加している。これは、大学受験時が近づくにつれて、自分の進路が少しずつ明確に固まっていくことを示唆している。

表4はA高校の国公立大学志願者に関して、国公立大学への実際の併願状況を学部系統別にみたものである。ただし、表2、表3とは異なり、第1志望と第2志望の区別はできない。A高校の国公立大学受験者のうち、志望学部系統一致者は80.9%(230人中186名)であった。この数字は、昭和62年度の国立大学全受験者に占める志望学部系統一致者の比率76.9%より幾分高い⁽⁸⁾。しかし、今回の調査の3年生10月段階の比率よりは低くなっている。これは高校調査の第1志望、第2志望と、国公立大学への実際の併願状況との、データの性格が異なっていることによる。高校調査の第1志望と第2志望は、あくまでも希望である。従って、入学試験期日が同じかどうか等といった、現実の受験可能性を考慮

に入れて申請する必要はない。また、受験に際しての現実の大学選択には、合格可能性や大学所在地(地理的要因)などが複雑に絡んでくる⁽⁹⁾。この実際の志願段階での、志望学部系統一致者の幾分の減少は、大学選択における希望と現実のギャップの現れと考えられる。

5. 志望学部系統の時間的揺れ

表2、表3ではA高校生の学部系統志望の傾向を横断的にみてきた。それでは、高校3年間のあいだに、志望学部系統はどの程度揺れる、或いは一貫しているのだろうか。第1志望に着目して、A高校の生徒の学部系統志望の経時的推移をみていこう。まず、表2、表3に示した8つの学部系統を用いて、4サンプル時点間の推移をみてみた⁽¹⁰⁾。多くの生徒は、同じ学部系統を連続して志望していた。しかし、そうでない生徒については、非常に多様なパターンがあることが分かった。それを全て示すのは煩雑にすぎる。そこで、ここでは、文系—理系のレベルで、その推移を追う

ことにした。

なお、ここで用いる文系—理系の志望学部・学科分類は、今回提供を受けたデータの中に、最初から含まれていたものである。それは、全国模試を行った予備校側で、生徒が申告した第1志望大学・学部・学科を、自動的に文系—理系いずれかに振り分けたものである。基本的には、表2、表3に示した、文科系、文系文理総合系、文系短大が文系に、それ以外の学部系統が理系に分類されている。

表5の表側は、4サンプル時点をとおしての文系学部志望—理系学部志望の揺れのパターンを示したものである。「総計」欄(表の左側)には、それぞれのパターンに対するA高校の生徒の出現頻度が示してある。上記4時点にわたる文系—理系の変動パターンは、

理論的には16通り(=2⁴)出現するはずである。しかし、今回は理系→文系→文系→理系といったパターンを示した生徒はいなかった。その点を除けば、文系—理系といった大雑把な分類でも、高校生の志望には様々な形の揺れがあることが分かる。

しかし、最初から最後まで文系または理系でとおした生徒(文系志望一貫者と理系志望一貫者: ①と⑮)は81.6%(355人)にも達し、多くの生徒は2年生の7月段階までには、ほぼ文系—理系の志望を確定しているものと考えられる。

柳井晴夫は高校生の意識調査の結果から、(a) 高校1年生段階では、文系—理系の区分もついていない生徒が40%を越えていること、(b) これが高校2年生になると10~25%

表5 履修コースと第1志望大学の文系・理系の推移

				総計 (A)			短大志望による揺れ (B)		家政・教育系志望による揺れ (C)		文系・理系併願による揺れ (D)		確実な志望の揺れ (A)-(B)-(C)-(D)		
第1志望大学				履修コース			履修コース		履修コース		履修コース		履修コース		
2年生 7月	2年生 1月	3年生 6月	3年生 10月	文系	理系	計	文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系	うち経済系学部志望者
①	文系	→文系	→文系	→文系	212	9	221	-	-	-	4	-	212	5	4
②	文系	→文系	→文系	→理系	9	2	11	4	-	2	-	1	2	2	-
③	文系	→文系	→理系	→文系	5	1	6	4	-	1	1	-	0	0	-
④	文系	→文系	→理系	→理系	4	3	7	2	-	1	-	-	1	3	1
⑤	文系	→理系	→文系	→文系	4	1	5	1	-	1	-	-	2	1	-
⑥	文系	→理系	→文系	→理系	1	0	1	1	-	-	-	-	0	0	-
⑦	文系	→理系	→理系	→文系	3	1	4	-	-	2	-	-	1	1	-
⑧	文系	→理系	→理系	→理系	0	3	3	-	-	-	1	-	0	1	-
⑨	理系	→文系	→文系	→文系	0	13	13	-	-	-	4	-	0	8	4
⑩	理系	→文系	→理系	→文系	0	3	3	-	-	-	1	-	0	0	-
⑪	理系	→文系	→理系	→理系	3	2	5	3	-	-	1	-	0	0	-
⑫	理系	→理系	→文系	→文系	1	9	10	1	-	-	2	-	0	7	6
⑬	理系	→理系	→文系	→理系	2	0	2	2	-	-	-	-	0	0	-
⑭	理系	→理系	→理系	→文系	0	10	10	-	-	-	5	-	0	5	5
⑮	理系	→理系	→理系	→理系	1	133	134	-	-	1	-	-	0	133	-
計				245	190	435	18	-	8	19	1	5	218	166	20

にまで減少し、かなり多くの生徒が文系—理系の進路を決定していること、を指摘している⁽¹¹⁾。高校2年次以降に限られている今回のデータからは、(a)に関する追認はできない。しかし、今回の結果は(b)とは一致している。(柳井は、高校のコース分けの時点と、文系—理系の志望の分化との関係には触れていない。しかし、柳井の示した結果は、多くの高校が2年生進級時点で、文系—理系のコース分けを行っていることと関連している可能性が高い。A高校のコース分けは2年生進級時点で行われている。従って、今回のA高校に関する数字もその点に関する注意が必要である。)

それでは、文系—理系の志望が揺れた生徒についてはどうであろうか。4時点のうち3時点で文系を志望し、1時点だけ理系に揺れた生徒(②, ③, ⑤)は、文系コース履修者に多い。一方、2年生7月時点には文系を志望していたが、後は一貫して理系を志望している生徒(⑧)、逆に2年生7月時点には理系を志望していたが、後は一貫して文系志望の生徒(⑨)は、理系コース履修者に限られている。同様に、初期の3時点では理系を志望しながら、3年生10月時点には文系を志望した生徒(⑭)、2年生の間には理系を目指しながら、3年生に入ると文系にくり替えした生徒(⑫)も、ほとんどが理系コース履修者に限られている。

このようにA高校では、文系コース履修者には、途中で一時的に理系に揺れることがある生徒が多い。これに対し、理系コース履修者の場合は、特に理系から文系へと、途中で全く志望を変更してしまう生徒が多い。

6. 確実な文系—理系の志望の揺れ

ここまで、文系—理系レベルで、第1志望

の時間的変遷をみてきた。つぎに、その内容をより詳細に知るために、第1志望の具体的学部名、第2志望との組み合わせパターンにまで下りて分析を行った。ここで最初に問題になったのは、上でみてきた志望の揺れは、志望学部・学科の文系—理系分類自体の問題点に帰せられる部分が多いことであつた(先に指摘したように、文系—理系の志望は、生徒が申告した第1志望大学・学部・学科をもとに、予備校側によって、2分法で自動作成されたものである)。

教育学部の小学校教員養成、養護教員養成、幼児教育などの課程は、提供されたデータでは、文系—理系分類の文系に分類されている。これは、芸術系学部・学科についても同様である。また、家政学部、体育系学部・学科は、学科名によって、文系、理系いずれかに分類されている。しかし、入試教科との関連でいえば、これらの学部に関する文系—理系の分類は必ずしも正確ではない。今回A高校の生徒が志望した大学の教育学部(ほぼ全てが国公立大学)の上記課程の2次試験は、国語、社会、外国語、数学、理科の5教科の中から1教科選択で行われている場合がほとんどである。(なお、教育学部の中学校、高校教員養成課程では、専攻教科別に文系—理系の区分がなされており、2次試験においても専攻教科が重視されているので問題はない。)

同様に、家政系、体育系のいずれの学科についても、国公立大学2次試験や私立大学本試験では、国語、外国語が必須で、数学、理科、社会の中から1科目選択制を採っている大学が多い。しかも、予備校のデータにもとづけば、入学難易度もそれ程高くないとされる。短期大学の入試に関しても事情は同じであるが、表では一応別掲してある。

従って、入試教科との関連で考えれば、文系学部系統志望者は、これら家政・教育学系

部を文系学部系統志望の一貫として考えている可能性が強い。事情は、理系学部系統志望者についても同様である。つまり、これら家政・教育系学部への志望によって引き起こされた、文系—理系の志望の揺れは、見かけ上の現象に過ぎない可能性が高い。

さらに表では、第1志望と第2志望に、4年制文系学部と4年制理系学部の組み合わせを選んだ生徒も摘出してある（「文・理併願」）。これは、生徒の側から、文系—理系の志望を明確にできないケースである。

以上の原因による志望の揺れをまとめたものが、表5の中央部分に示してある。表中の数字の上に  の網掛けがなされているものは、文系—理系の揺れのパターン（表側）上の同じ網掛け部分の変動に関わることを示している。表中の数字上に網掛けがなされていないものは、文系—理系の揺れのパターン上の  の網掛け部分の変動に関わることを示している。

文系コース履修者では、志望が一貫していない生徒は32名いる。このうち、この志望の揺れが、短大志望に関連する生徒が18名、家政・教育系志望に関連する生徒が8名いる。（さらに、志望の揺れが文・理併願によって引き起こされた生徒が1名。）また、2年生に上がる段階で文系コースを選択しながら、一貫して理系志望の生徒（⑮）も、志望学科は、教育学部小学校教員養成課程、および養護教員養成課程、と家政系学科の間で揺れている。つまり、文系コース履修者の文系から理系への志望の揺れは典型的には、第1に短大志望、第2に家政・教育系学部志望によって引き起こされている。

一方、理系コース履修者では、志望が一貫していなかった生徒は48名いる。このうち、この志望の揺れが、家政・教育系志望に関連する生徒が19名、文・理併願によって引き起

こされた生徒が5名いる。つまり、理系コース履修者の理系から文系への志望の揺れは典型的には、第1に家政・教育系学部志望、第2に文・理併願の形をとって現れている。

さらに、表面的には、⑥ 文系→理系→文系→理系、⑩ 理系→文系→理系→文系、といった極端な形で文系—理系の志望の揺れを示す生徒がいた。しかし、これらは全て、文系コース履修者の短大志願、理系コース履修者の文・理併願によって引き起こされていることが分かる。

以上の原因によって志望が揺れた生徒を除いた数字が、表の右側に示してある。文系コース在籍者では、文系志望一貫者（①）を除けば、以下のパターンが残ることになる。（a）3年生6月以降の文系から理系への転向者（②、④）、（b）2年生1月から3年生6月にかけて文系から理系に一旦は揺れ、3年生10月には再び文系志望に変わった生徒（⑤、⑦）である。かれらは一時的にしる、純粋に理系学部（工学系、理学・農学系、医・歯・薬系等）へ志望を変更することを考えた生徒である。しかし、そのようなパターンを示す生徒は合計6名しかいない。

一方、志望が揺れた理系コース在籍者の中で中心を占めるのは、2年生1月以降の理系から文系への転向者（⑨、⑫、⑭）である。計20名がこのパターンによる志望の揺れを示している。その他のパターンとしては、（a）2年生1月以降の文系から理系への転向者6名（②、④、⑧）、（b）2年生1月から3年生6月にかけて文系から理系に一旦は揺れ、3年生10月には再び文系志望に変わった生徒2名（⑤、⑦）がいる。つまり、理系コース在籍者においては、文系転向を除けば、純粋に文系—理系で志望が揺れる生徒は極めて少ない。

7. 文系転向者の志望学部

それでは、理系コース在籍の文系転向者は、どのような文系学部へ志望変更したのであるか。理系から文系への転向者(⑨, ⑫, ⑭)は全体で33人いる。このうち、11名は家政・教育系学部の、16名は経済系学部の志望者である。また、理系コース在籍者の中で、4サンプル時点をとおして文系学部を志望し続けた生徒(①)は9人いる。このうち、4サンプル時点をとおして家政・教育系学部を志望した生徒、及び経済系学部を志望した生徒は、各4名ずついる。合計すると、理系コース在籍の文系転向者・文系志望一貫者42人中、家政・教育系学部の志望者は15名、経済系学部の志望者は20名、計35名となる。つまり、理系コース在籍の文系転向者・文系志望一貫者の多くは、家政・教育系学部、経済系学部の志望者であることが分かる。(同様に、理系コースに在籍した、3年生6月時点の理系転向者：④のうち1名は、経済系学部志望からの理系学部転向者である。)

今回の文系一理系分類のもとになった予備校の学部分類に限らず、一般的にも、経済系学部は文系学部へ属するものとされる。しかし、入試教科からみる限り、経済系学部は、その他の文系学部とは違う幾分ユニークな位置付けをもっている。一般的に、国公立大学

2次試験、私立大学本試験を問わず、経済系学部の入試では、国語、外国語のいずれか一方を必ず選択させるようにしている。そして、残り一方の教科と数学、社会の3教科の中から1~2教科選択させるという組み合わせが多い。しかも、共通1次成績からみる限り、一般的に経済系学部では、5教科の中で合否判定に最も大きい影響力をもつのは、数学の成績であることが確かめられている⁽¹²⁾。このように、経済系学部では、選択教科の形をとって、数学の出来る生徒にも、門戸の一部を積極的に解放しているところが多い。A高校に限らず、一般的に文系転向者の多くは経済系学部を志望すると言われる。この現象も、以上でみた入試教科との関連で考えれば、納得できるものである。

このことは、文系コース履修者と理系コース履修者で、経済系学部志望者の平均学力パターンが違うことから裏付けられる。表6は、経済系学部志望者について、履修コース別に各教科ごとのテスト成績の平均値を示したものである(これを図化したものが、図1である)⁽¹³⁾。3年生10月時点については、第1志望に経済系学部を記入した生徒を取り出している。国公立大学出願時については、少なくとも1つの経済系学部に志願した生徒を取り出している。いずれも5教科全てのテストを受けた生徒に対象を限っている(以下の図表

表6 履修コース別にみた経済学部志望者の教科プロフィール

	履修コース	人数	国語	社会	外国語	理科	数学
3年生10月時点	文系コース	39	51.7	51.2	47.3	49.8	46.7
	理系コース	23	48.4	48.9	48.1	46.5	47.3
国公立大学出願時	文系コース	27	60.4	51.2	46.1	44.7	43.3
	理系コース	21	50.6	53.9	44.9	37.9	52.2

3年生は10月時点についての数字は標準得点。

国公立大学出願時についての数字はパーセンタイル順位。

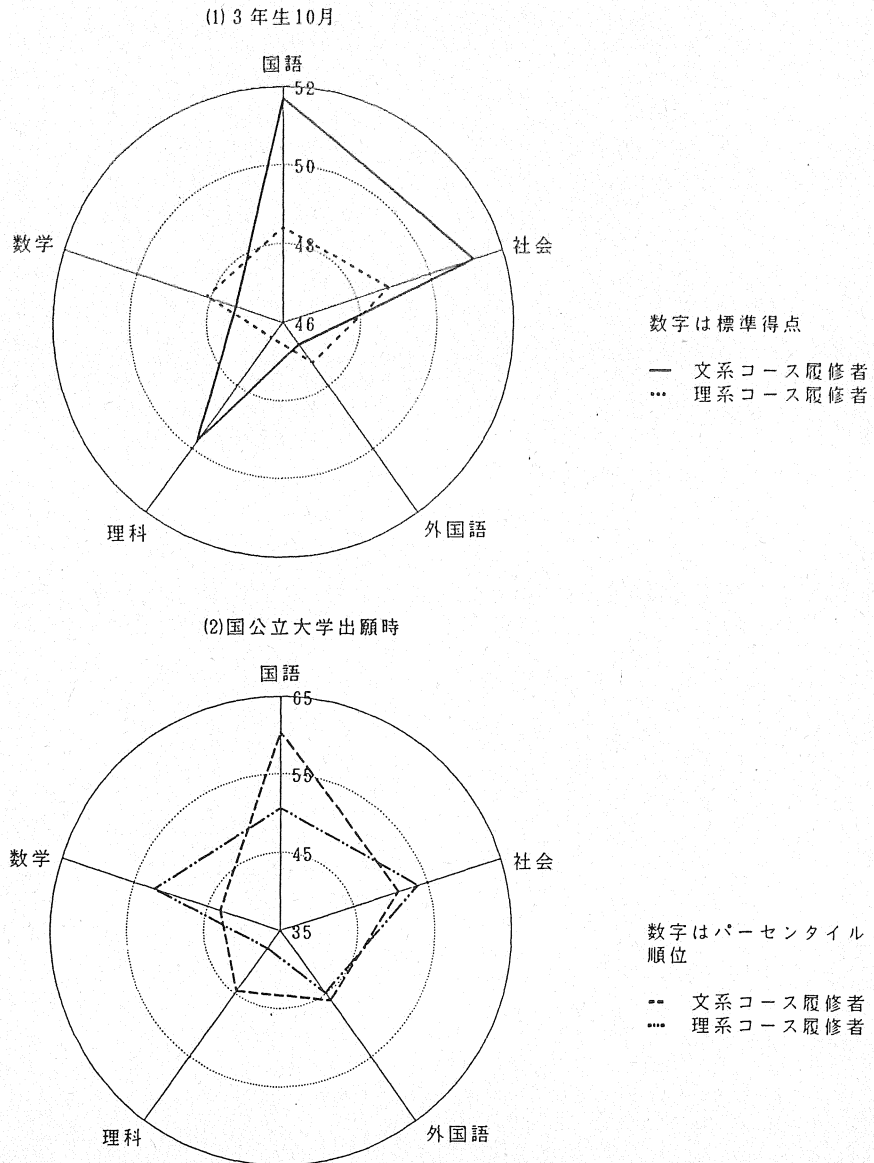


図1 履修コース別にみた経済学部志望者の教科プロフィール

についても同様)。

理系コース履修者は文系コース履修者に比べ、3年生10月時点では、数学と外国語の成績が高く、国語、社会、理科の成績が低い。(他の3サンプル時点でも以上の傾向は変わらなかった。)同様に、国公立大学出願時では、数学と社会の成績が高く、国語、外国語、理科

の成績が低い。高校2～3年、出願時をとおして、理系コース履修者は文系コース履修者に比べ、数学の成績がよく、国語、理科の成績が悪い点は共通している。選択科目の問題もあるが、理系コースを履修しながら、理科の成績が文系コース履修者に比べ低いことは興味深い。理系学部から経済学部へと志望を転

向した生徒の多くは、数学の成績は悪くないが、理科の成績が伸びなかった生徒であることが示唆される⁽¹⁴⁾。

以上より、A 高校における生徒の志望の揺れは、つぎのようにまとめられよう。

(a) 高校 2~3 年生の時点をとおして、一貫して文系もしくは理系の学部を志望する生徒が大多数である。

(b) 志望先変更者に関しては、文系コース履修者には、途中で一時的に志望が理系に揺れる生徒が多い。このような文系—理系の志望の揺れは、第 1 に短大志望、第 2 に家政・教育学部志望によって引き起こされている。これら入試教科からみると文系—理系の区分が曖昧な学部志望を除けば、純粋な理系学部への揺れを示す生徒は極めて少ない。

(c) 理系コース履修者の場合は、途中で全く志望先を変更してしまう生徒(文系転向者)が多い。文系志望一貫者を含めて、文系転向者の多くは、経済系学部、家政・教育学部への志望者である。特に入試において数学でも勝負できる経済系学部へは、理科の学力が伸びなかった生徒が、志望変更している傾向がみられる。理系コースにおいては、文系転向以外の志望の揺れを示す生徒は少数である。これは主に、家政・教育学部への志望、文・理併願者によって引き起こされている。それらを除くと、文系転向以外の純粋な志望の揺れを示す生徒はごく少数である。

8. 志望学部系統と教科別成績

それでは、志望学部系統ごとに、平均学力パターンの相違はみられるのであろうか⁽¹⁵⁾。表 7 は、各学部系統を志望した生徒の教科別成績の平均値を示したものである(これを図化したものが、図 2、図 3 である)。志望学部系統は、3 年生 10 月時点については第 1 志望

の学部系統をもとにした。国公立大学出願時については、同一学部系統併願者、単願者をサンプルとした。また、3 年生 10 月時点に関する後述の傾向は、他の 3 サンプル時点でも変わらなかった。

まず、A 高校全般に関する傾向としては、以下の点が指摘できる。

(1) A 高校の生徒は全般に、国語の成績が高い。国語の偏差値、パーセンタイル順位ともに、短大志望者を除けば、50 を上回っている。

(2) 文系(文科系、文系文理総合系)学部系統志望者は、理系(理系文理総合系、工学系、理学・農学系、医・歯・薬系)学部系統志望者に比べ、社会以外の教科の成績が全て低い(工学系の国公立大学志願者については、社会の成績も文系学部系統志願者より高い)。

(3) 文系学部系統志望者と理系学部系統志望者を比較すると、5 教科の中でもとくに数学の成績の差が大きい。さらに、このパターンは、国公立大学の志願にまで受け継がれている。A 高校では高校 2 年~3 年出願時点を通じて、文系—理系の志望先の分化を決定する上で、数学の成績の果たす役割が大きいことが示唆される。(ただし、この傾向は全国的に共通した傾向ではない⁽¹⁶⁾。)

つぎに、志望学部系統別に、各教科の平均成績をみてみよう。

(4) 短大志望者は、4 年生大学志望者に比べ、全ての教科の成績、特に数学の成績が低い。

(5) 医・歯・薬系学部志望者は、他の学部系統志望者に比べ、全教科の成績が高い。

(6) 文科系学部志望者は、3 年生 10 月時点では、他教科に比べ、国語、社会の成績が高い。国公立大学出願者については、次いで外国語の成績が高くなっている。

(7) 工学系志望者は、3 年生 10 月時点で

表7 志望学部系統別教科プロフィール

(1) 3年生10月時点

	人数(人)	国語	社会	外国語	理科	数学
文科系	117	52.4	50.7	49.7	49.5	46.9
文系文理総合系	136	52.0	47.5	48.0	49.6	46.3
理系文理総合系	14	55.5	47.9	48.1	53.9	50.9
理学・農学系	26	54.9	48.8	48.6	53.3	55.9
工学系	99	53.8	49.0	52.7	53.2	55.0
医歯薬学系	13	60.6	49.9	54.9	59.6	59.6
短大	29	45.7	41.7	44.6	44.6	39.8

(数字は標準得点)

(2) 国公立大学志願者

	人数(人)	国語	社会	外国語	理科	数学
文科系	61	58.5	55.7	52.0	46.0	46.2
文理総合系	65	60.6	44.5	42.9	53.9	49.7
理学・農学系	12	56.9	54.7	44.8	70.0	76.0
工学系	41	62.5	62.1	68.8	72.4	84.2
医歯薬学系	1	67.7	70.5	86.0	55.5	96.7

(数字はパーセンタイル順位)

は、5教科の中では、数学の成績が高く、社会の成績が低い。国公立大学出願者については、数学と理科、ついで外国語の成績が高い。

(8) 理学・農学系志望者は、工学系志望者に比べ、外国語の成績が低い。

(9) 文系、理系ともに、文理総合系志望者は、5教科の中では、国語と理科の成績が高く、社会、外国語の成績が低い。

山田文康は、共通1次連続受験者(共通1次を2年間連続して受験した者)の学力パターンの変遷過程を調べ、以下の知見を得た。

(a) 国語(社会)の成績のよい者は、やがて社会(国語)の成績もよくなっていく者が

多い。

(b) 数学(理科)の成績のよい者は、やがて理科(数学)の成績もよくなっていく者が多い。

(c) その次の段階として、(a),(b)とも外国語の成績が上昇していく者が多い。

即ち、文系学部を目指す受験生は国語、社会、外国語の組み合わせからなる学力パターンへ、理系学部を目指す受験生は数学、理科、外国語の組み合わせからなる学力パターンへと、収斂していく可能性が高いことを示唆している⁽¹⁷⁾。

少なくとも、国公立大学の文科系および工

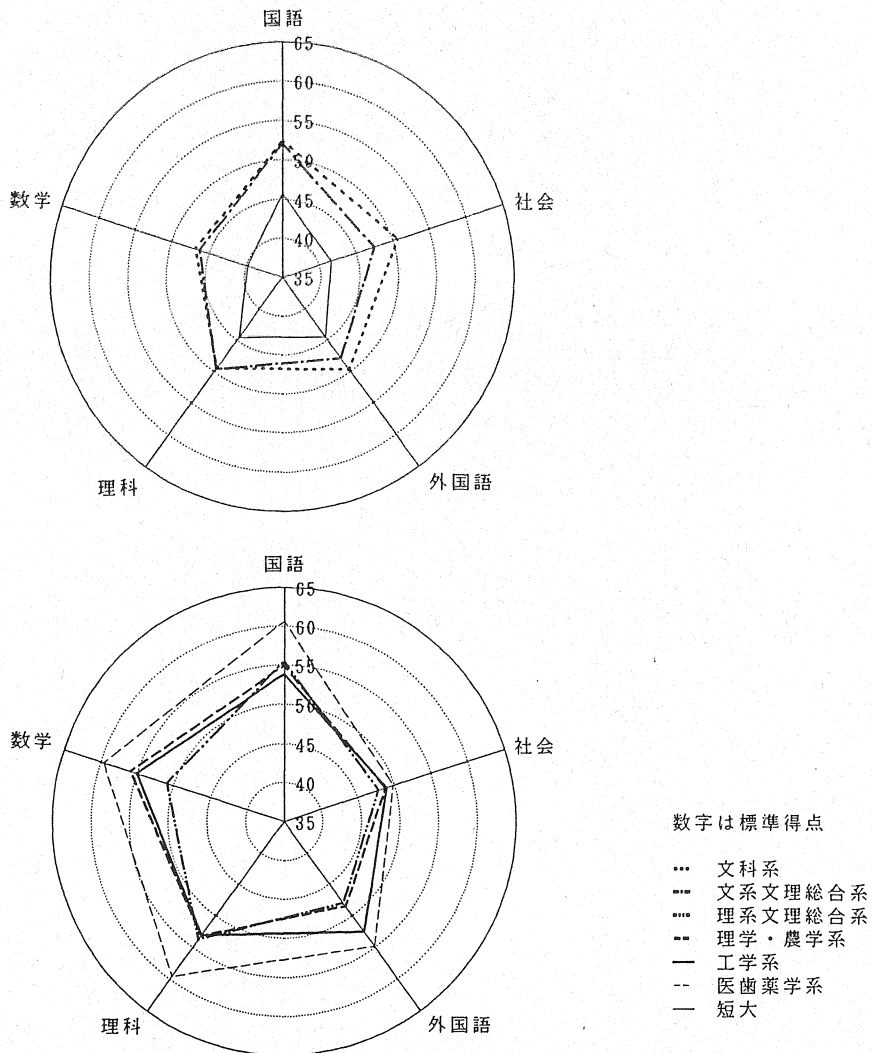


図2 志望学部系統別教科プロフィール (3年生 10月時点)

学系学部志願者に対しては、これと一致した傾向がみられた。しかし、高校在学中の4サンプル時点に関しては、この傾向は明瞭には出てこなかった。(この原因については現段階では不明である。上記(1)~(3)のA高校特有の特徴の影響関係を含めて、今後の課題としたい⁽¹⁸⁾。)

9. 国公立大学志願者と私立大学・短大専願者の学力パターン

それでは、国公立4年制大学志願者(以下単に国公立大学志願者と呼ぶ)と、そうでない生徒の間に、学力パターンの相違は存在するのであろうか。前に述べたように、例えば、国公立大学志願者=5教科型、私立大学・短大専願者=3教科型、という図式はみられるの

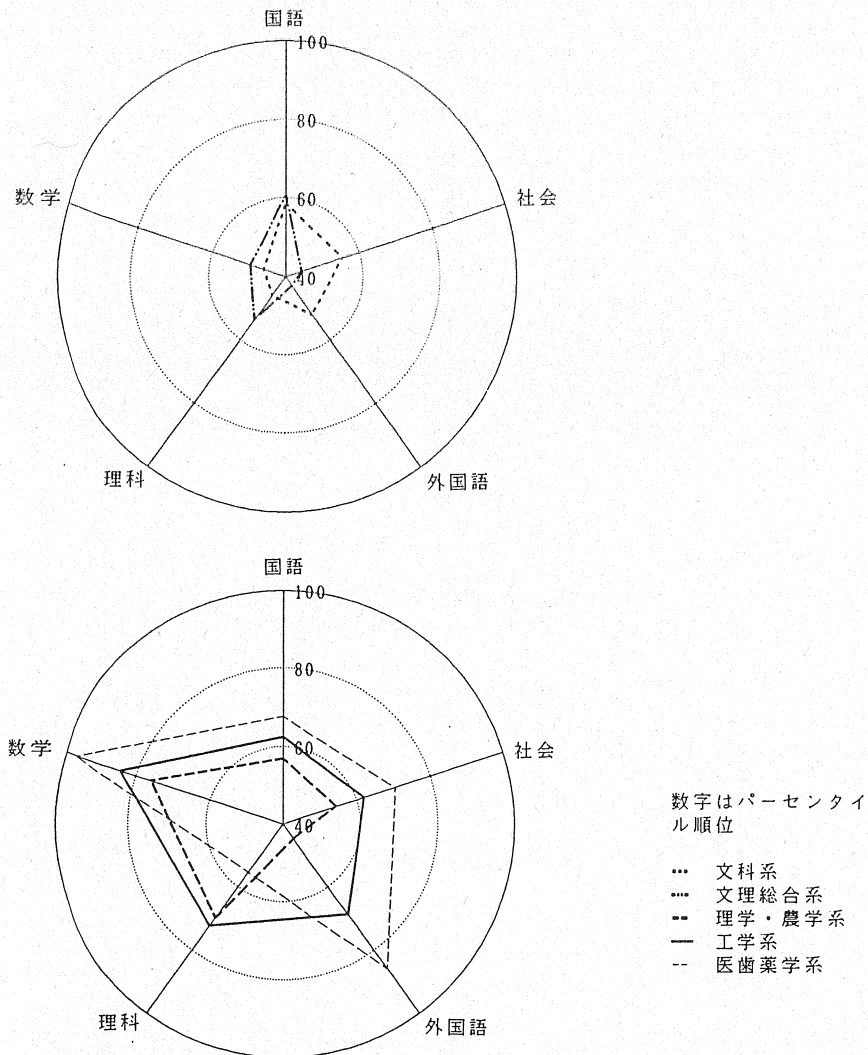


図3 志望学部系統別教科プロフィール（国公立大学志願者）

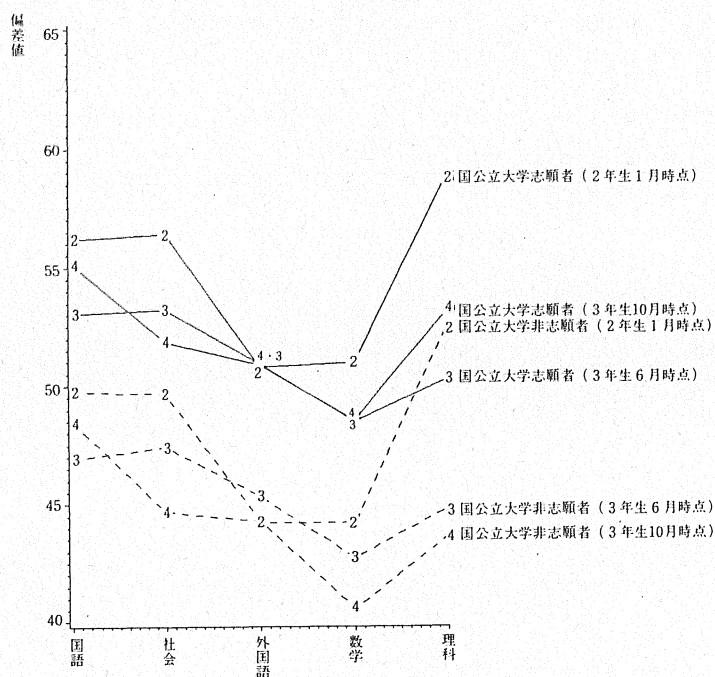
であろうか。

図4は、国公立大学志願者と国公立大学非志願者（多くは私立大学または短大の専願者と考えられる）について、2年生1月以降の3サンプル時点の、5教科成績の平均値を比較したものである。

A 高校では学校の指導として、国公立大学志願に関する意志の有無にかかわらず、全生徒に共通1次受験を強く奨励している。この

こともあって、少なくとも昭和63年度に関しては、共通1次は受験したが、国公立大学に志願しなかった生徒が多数存在した。これら共通1次は受験したが国公立大学に志願しなかった生徒も、ここでは国公立大学非志願者のカテゴリーに含むことにした⁽¹⁹⁾。ここでは、文系学部志望者と理系学部志望者に分けて分析を行っているが、これは3年生10月時点での志望に準拠したものである。

① 文系学部系統志望一貫者



② 理系学部系統志望一貫者

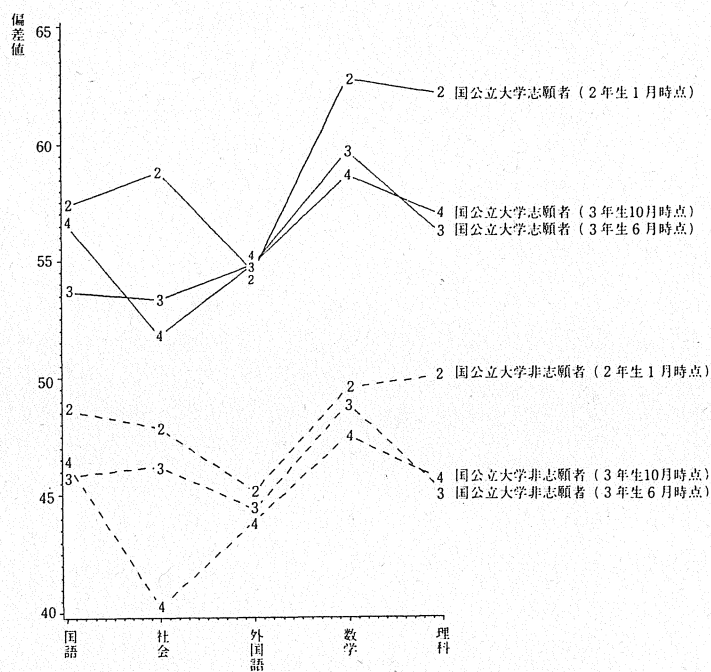


図4 国公立大学志願者と非志願者の5教科成績平均値

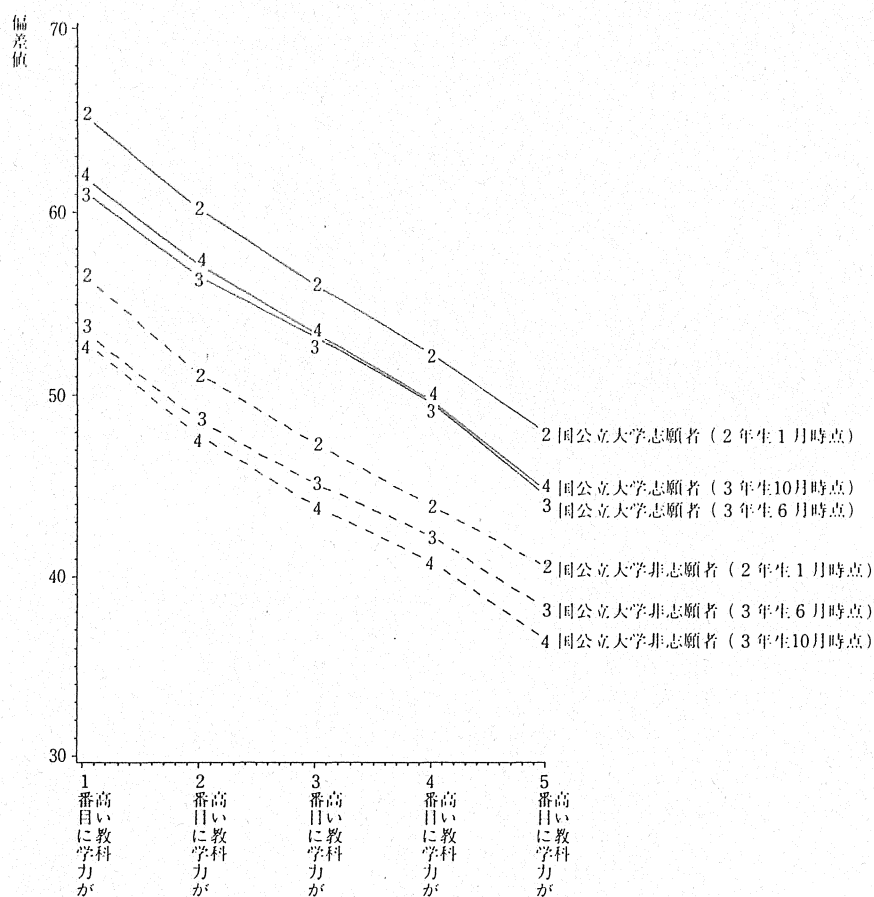


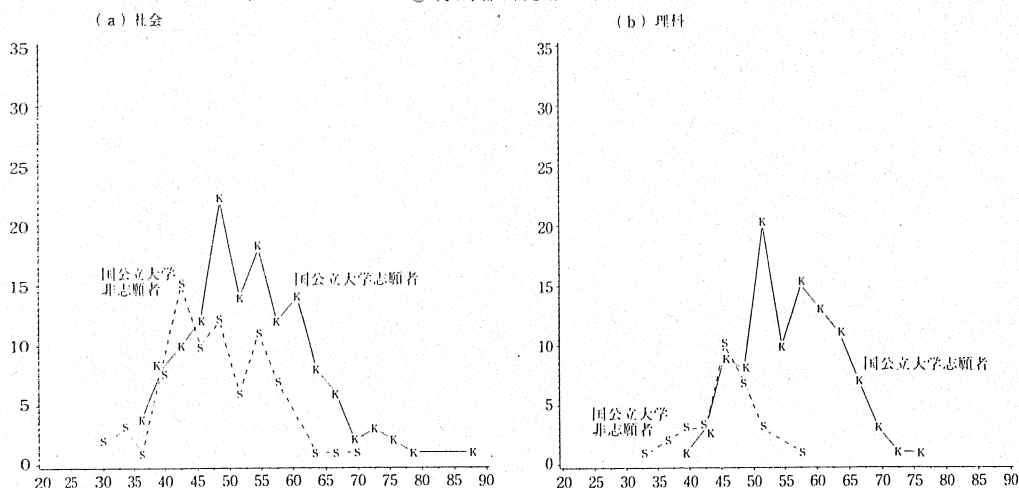
図5 国公立大学志願者と非志願者の偏差値上位順教科平均点

ここでは、同じ回数目に行われたテストで、国公立大学志願者と国公立大学非志願者（同じ数字が入った実線と破線）を比較しよう。文系志望一貫者、理系志望一貫者とも、国公立大学志願者の方が、国公立大学非志願者に比べて、5教科全てについて偏差値が5～8点高い⁽²⁰⁾。つまり、このことは以下の2点を意味している。(a) 国公立大学志願者の方が、国公立大学非志願者に比べて、学業成績は絶対的に高い。しかし、(b) 両者の教科の出来・不出来のパターンには差がない。つまり、A高校の国公立大学非志願者は、国公立大学志願者以上に、特定の教科に勉強を集中し、他の教

科を「捨て」ている訳ではない⁽²¹⁾。

図4でみられた傾向は、国公立大学非志願者の教科の「捨て」方がランダムなことによって引き起こされたものではない。このことは、教科名を問わず、偏差値の高い教科から順に偏差値の平均をとった、図5から確かめられる。つまり、国公立大学志願者に比べて、国公立大学非志願者の方が、例えば、3教科目から4教科目にかけての落ち込みが激しいという傾向はみられない。なお、ここでは3年生6月のデータに関する図のみを提示したが、どの時点でも大方の傾向に変わりはない（以下の図についても同様）。

① 文系学部系統志望一貫者



② 理科学部系統志望一貫者

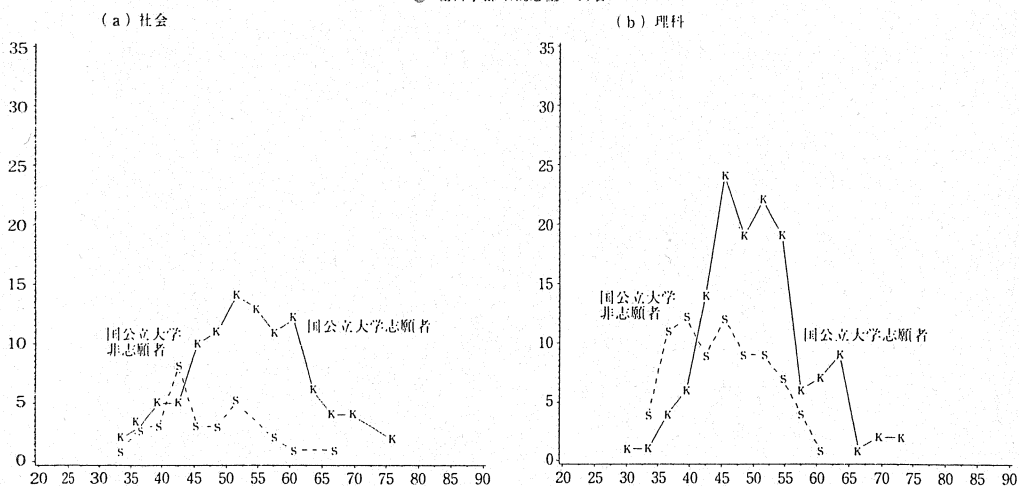


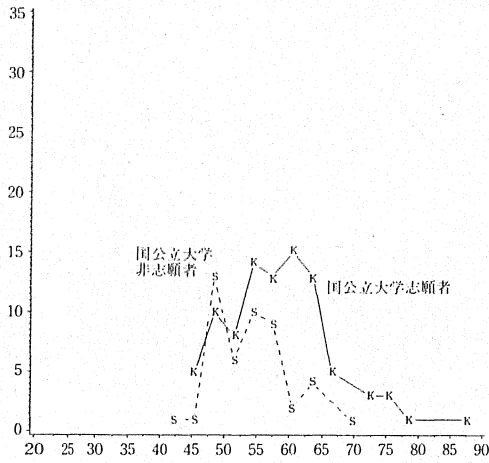
図6 国公立大学志願者と非志願者の理科、社会の得点分布

以上はいずれも平均値による比較を行ったに過ぎない。従って、以上の結果は国公立大学非志願者が各教科について、出来のよいグループ（その教科を「捨て」なかったグループ）と、出来の悪いグループ（その教科を「捨て」たグループ）とに2極分化しているためにもたらされたとも考えられる。そこで、図6と図7で分布形を確かめておこう。国公立大学志願者と非志願者に関して、図6は各教科の得点分布を、図7は個人内での出来のよ

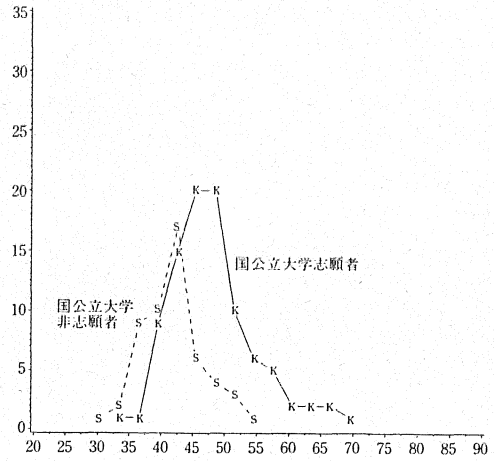
い（偏差値の高い）教科順にその得点分布を示したものである。なお、図6については、文系志望者と理系志望者で、最も勉強量に差がでるとされる理科と社会についてのみ示してある。また、図7については、文系学部系統志望一貫者についてのみ示してある。（ただし、図6については他の教科に関しても、図7については理系学部系統志望一貫者に関しても、以下に述べる傾向は同様にみられた。）

どちらの図でも、国公立大学非志願者の分

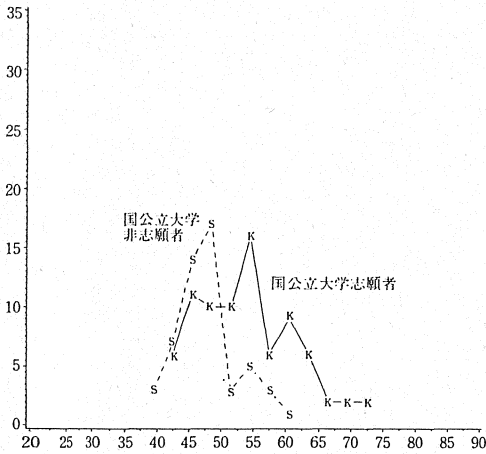
① 1 番目に出来のよい教科



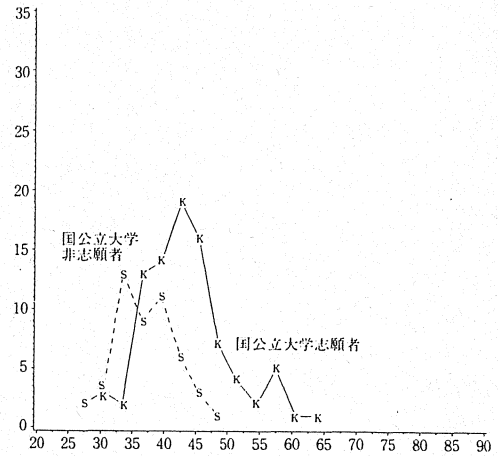
④ 4 番目に出来のよい教科



② 2 番目に出来のよい教科



⑤ 5 番目に出来のよい教科



③ 3 番目に出来のよい教科

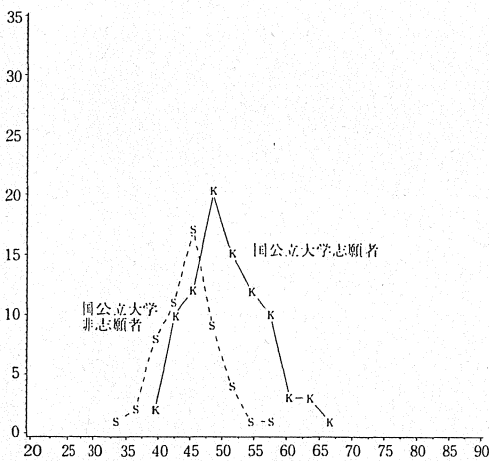


図7 国公立大学志願者と非志願者の1～5番目に出来のよい教科の得点分布(文系学部系統志願一貫者)

布は、国公立大学志願者の分布を、得点の低い方へほぼそのままシフトさせた格好になっている。即ち、国公立大学非志願者についても、出来のよいグループ（その教科を「捨て」なかったグループ）と、出来の悪いグループ（その教科を「捨て」たグループ）とに2極分化している、といった傾向はみられない。

A高校では文系、理系いずれのコース履修者に対しても、5教科をまんべんなく学習させるようなカリキュラムを組んでいる。また、先述のようにA高校では「捨て」教科を作らせないように、全生徒に共通1次を受験するように指導している。さらに、表1でみたように、A高校の生徒の国公立大学志向は極めて強かった。（これも、このような指導と一貫したA高校の進学方針によるところが大きい可能性がある。）いずれにせよ、このような学校側のカリキュラムや指導の効果、生徒側の志望傾向もあって、少なくともA高校では、国公立大学志願者=5教科型、私立大学・短大専願者=3教科型という単純な構図はみられない。逆の見方をすれば、この結果は、A高校のような進学方針を立てれば、生徒に「捨て教科」を作らせないことが可能になることを示唆している。

10. ま と め

本稿では、A高校を事例にとり、高校生の大学選択がいかに固まっていくかを、教科別成績との関連などで明らかにしてきた。そこで得られた知見を列記すると以下のとおりである。

- (1) A高校においては、国公立4年制大学志向が極めて強い。ただし、このようなA高校においてさえ、文系コース履修の女子生徒の比較的多くが、一度は4年制大学と短期大学との狭間で志望が揺れて

いる。

- (2) 志望学部系統一致者（第1志望と第2志望に同じ学部系統を志望した者）の割合は、高校2～3年、国公立大学出願時のいずれの時点をとっても、常に3/4以上に達する。しかも、時期が進むにつれて、志望学部系統一致者の比率は増加している。これは、大学受験の時期に近づくにつれて、自分の進路が少しずつ明確に固まっていくことを示唆している。
- (3) 大多数の生徒は、高校2～3年生の時点をとおして、履修コースとともに、志望学部系統が文系—理系のレベルでは一貫している。つまり、A高校のコース分けが2年生進級時点で行われていることもあり、多くの生徒は2年生7月段階までには、ほぼ文系—理系の志望先を確定している。
- (4) 志望先変更者に関しては、文系コース履修者には、途中で一時的に志望が理系に揺れる生徒が多い。このような文系—理系の志望の揺れは、第1に短大志望、第2に家政・教育学学部志望によって引き起こされている。これら入試教科からみると文系—理系の区分が曖昧な学部志望を除けば、純粋な理系学部への揺れを示す生徒は極めて少ない。
- (5) 理系コース履修者の場合は、途中で全く志望先を変更してしまう生徒（文系転向者）が多い。文系志望一貫者を含めて、文系転向者の多くは、経済系学部、家政・教育学学部への志望者である。特に入試において数学でも勝負できる経済系学部へは、理科の成績が伸びなかった生徒が、志望変更している傾向がみられる。理系コースにおいては、文系転向以外の志望の揺れを示す生徒は少数である。これは主に、家政・教育学学部への志望、文・

理併願者によって引き起こされている。それらを除くと、文系転向以外の純粋な志望の揺れを示す生徒はごく少数である。

- (6) ① 短大志望者は、4年制大学志望者に比べ、全ての教科の成績、特に数学の成績が低い。② 医・歯・薬系学部志望者は、他の学部系統志望者に比べ、全教科の成績が高い。③ 文科学部志望者は、他教科に比べ、国語、社会の成績が高い。④ 工学系志望者は、5教科の中では、数学の成績が高く、社会の成績が低い。⑤ 理学・農学系志望者は、工学系志望者に比べ、外国語の成績が低い。⑥ 文理総合系志望者は、5教科の中では国語と理科の成績が高く、社会、外国語の成績が低い。
- (7) A高校では、文系、理系いずれのコース履修者に対しても、5教科をまんべんなく学習させるようなカリキュラムを組み、全生徒に共通1次試験を受験するように指導をしている。このような学習指導の効果もあって、A高校の国公立大学非志願者は、国公立大学志願者以上に、特定の教科に勉強を集中し、他の教科を「捨て」ている訳ではない。しかし、国公立大学志願者の方が、国公立大学非志願者に比べて、どの教科をとっても成績は高い。

以上で列記した個々の知見は、以下のよう
に総合することができる。

- (a) 具体的な学部名までは別として、少なくとも将来、文系—理系いずれの学部に進みたいかについては、高校初期段階において既にイメージされている。
- (b) 志望学部系統ごとに、生徒の学力パターンは異なっている。
- (c) 国公立4年制大学を志願するか、私立

大学・短大を専願するか、といった大学選択は、少なくともA高校においては、全体的学力水準をもとになされている。

(b)に関しては、一般的に各学部系統の入学試験で重視されている（または、それをと
として、生徒がそれらの学部教育と密接な関連があると考える）教科にウエイトをかけて勉強を重ね、学力を上昇させていく場合が多いと考えられる。つまり、自分の学力パターンを、入試教科にあわせていくケースである。しかし、このような勉強を重ねても、志望学部系統が重視する教科の成績が、思ったように上昇しない生徒も存在する。このような場合、自分の学力パターンを見合わせて（合格可能性も視野に入れて）、志望学部を変更するケースもみられる。これを典型的に現わしているのは、理系学部志望から経済系学部志望への転向者である。

いずれにしろ、学部系統選択を含めて、大学選択は全体的学力のみならず、学力パターンとの関連からも追求される必要があることは確かである。

最後に今後に残された課題について触れておきたい。

(1) 上記(a)に関連して、文系—理系の進路イメージは、何時どのような形をとって形成されるのであろうか。文系—理系の進路イメージは、将来就きたい職業イメージの形成過程と密接な関係をもつことが考えられる。深谷昌志は、学業成績が高い小学生ほど、将来の希望職業としてテクノクラート志向が強くなり、学業成績が低い小学生ほど、大衆的職業志向が強くなることを指摘している⁽²²⁾。つまり、小学校6年生段階で既に、学業成績と将来の希望職業との間には関連がみられる。同様に、例えば、国語・社会の得意な生徒は、一般的に文系的と考えられる職業を、理科・数学の得意な生徒は、理系的と考えられ

る職業を志向している可能性がある。即ち、教科別成績と将来の希望職業イメージとの間にも何らかの関係がみられる可能性がある。このような小学校、中学校時代の学力パターンと希望職業イメージとの関連を含めて、文系—理系の進路イメージの形成過程を分析する必要がある。

(2) 上記(b)に関連して、既に上でも述べたが、一方で、個々の学部系統の入試教科が、生徒に特定の学力パターンを形成させる可能性が考えられる。他方、学力パターンはあまり変化しないものであり、各生徒はそれに合った志望学部を選択している可能性もある。以上いずれの可能性が強いのか解明する必要がある。

〔注〕

- (1) 拙稿「学部新設と志願者の移動」、『IDE 現代の高等教育』No.316, 民主教育協会, 1990年。

また、大学選択を行う時に「希望する職業に関連した学部・学科があること」を最も多くの高校生が考慮する、との調査結果もある(大学入試センター『高等学校の進学指導における個性尊重に関する調査研究報告書—偏差値を主とした進学指導の改善を中心として—』平成3年, P.138)。

- (2) 例えば、下記の文献参照。これらの研究では、他教科に比べ、数学、英語の規定力が大きいことで一致している。これらの文献の中で特に⑤は、1つの高校をケース・スタディとして扱い、生徒の成績を縦断的に分析しているという意味で、本研究に近いものであることを付記しておく。

- ① 日本教育学会入試制度研究委員会『大学入試制度の教育学的研究』, 東京大学出版会, 1983年, 第II部第2章。
- ② 江原武一「高等学校卒業者の進路選択に関する要因分析」, 『教育学研究』第40巻第1号, 1973年。
- ③ 深谷昌志・深谷和子『現代子ども論』, 有

斐閣双書, 昭和50年, 第5章。

- ④ 深谷昌志 編『現代っ子と学校』, 第1法規, 昭和53年, 第6章。
- ⑤ 近藤博之・馬場将夫「最近の高校卒業生における学業成績と進路の分化」, 『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録』第6巻, 1985年。
- ⑥ 潮木守一・藤田英典・滝 充・佐藤智美・川嶋太津夫・岩田弘三「中学校文化の構造的分析—進路展望の形成過程—」, 『名古屋大学教育学部紀要—教育学科—』第27巻, 1980年, 第2章。
- ⑦ 名古屋大学 SEOP 研究会 編『中学生・高校生の生活と意識—職業的自我の形成に関する研究(中間報告)』, トヨタ財団助成研究報告書, 1982年, 第3章。
- (3) 荻谷剛彦「閉ざされた将来像—教育選抜の可能性と中学生の「自己選抜」—」, 『教育社会学研究』, 第41集, 1986年, PP.105-106。
- (4)① 柳井晴夫「進路選択と適性」, 日経新書, 昭和50年, PP.53-56。
- ② 前掲, 潮木ほか, 第2章。
- ③ 前掲, 名古屋大学 SEOP 研究会, 第3章。
- (5)① 岩坪秀一・池田輝政・岩田弘三「大学が重視する入試教科と受験生の学力特性—共通第1次学力試験の5教科得点を基礎にして—」, 『大学入試センター研究紀要』No.17, 1988年, 特に第3章。
- ② 前掲, 柳井, PP.82-83。
- ③ 山田文康「共通第1次学力試験の5教科得点に基づく学力型の分析」, 『大学入試センター研究紀要』No.19, 1990年, PP.34-38。

後述するように、③の文献では、共通1次受験者に関する分析を行い、文系学部を目指す受験生は国語、社会、外国語の組み合わせからなる学力パターンへと、理系学部を目指す受験生は数学、理科、外国語の組み合わせからなる学力パターンへと、収斂していく可能性が高いことを示唆している。多くの国公立大学の2次試験教科は、いわゆる文系学部では国語、社会、外国語の組み合わせで、理系学部では数学、理科、外国語の組み合わせでなされることが多い。従って、山田の指摘は、志望学部系統を決定した受験生は、このような大学入試教科の現実に

合わせて、その志望学部系統の入試で重視されている教科の学習を重点的に行うようになるにつれ、それら教科の学力が他の教科より高くなる可能性があることを示唆している。

- (6) ① 池田輝政・山村 滋・岩田弘三「生徒の志望分野と教科の学力との関係についての分析—A 高等学校生徒の追跡調査結果」, 前掲, 『高等学校の進学指導における個性尊重に関する調査研究報告書』。
- ② 池田輝政・山村 滋・岩田弘三「受験時点と在学中の5教科成績プロフィールの特徴—ある高等学校についての事例分析」, 『大学入試センター研究紀要』, No. 21, 1992 年。
- (7) 池田輝政・鈴木規夫・前川眞一「大学・学部の併願行動の一貫性—第1回の受験機会の複数化の場合」, 『大学入試研究の動向』第6号, 国公立大学入学者選抜研究連絡協議会, 昭和63年。
 なお、各学部系統に含まれる具体的な学部名については、前掲論文(岩坪・池田・岩田, P. 120) 参照。
 また、池田等は、第1志望学部系統と第2志望学部系統が一致している者を、志望学部系統の「一致者」ではなく「一貫者」と呼んだ。しかし、本稿では今回サンプルにとった4時点をとおして同じ学部系統を志望した生徒を「一貫者」と名付けた。これと区別するため、ここでは池田等の命名によらず、「一致者」と呼ぶことにした。
- (8) 前掲, 池田・鈴木・前川, P. 48.
- (9) ① 拙稿, 「国公立大学2次試験出願者の地理的選択の範囲に関する分析」, 『大学入試フォーラム』No. 8, 1986 年。
- ② 拙稿, 「学部系統別にみた受験者の地理的選択の範囲」, 『大学入試フォーラム』No. 10, 1987 年。
- ③ 前掲, 拙稿, 1990 年。
- (10) A 高校からは、今回のサンプル集団について、実際の全受験大学・学部のデータの提供を受けた。しかし、どの大学・学部が第1志望であり、どの大学が滑り止めであったのか等、志望の優先順位に関する情報は、そこには含まれていなかった。それなしでは、場合によっては文系—理系の枠を越えて、複

数の学部系統にわたる、生徒一人当たり平均4~5校の受験大学・学部の解析は煩雑に過ぎた。今後の課題にしたい。

- (11) 前掲, 柳井, PP. 79-81.
- (12) ① 清水留三郎「共通1次学力試験の成績から見た国公立大学・学部による入学者選抜の特性」, 『大学入試センター研究紀要』No. A6, 1985 年(非公開), PP. 6-7.
- ② 清水留三郎「共通1次試験の成績から見た国立大学と公立大学の各学部による入学者選抜の特性」, 『大学入試フォーラム』No. 8, 1986 年, PP. 78-79.
- (13) 理科, 社会の2科目受験者に関しては、テスト成績の高い科目を、教科成績として代表させた。
- (14) この点は、表6の理系コース在籍の経済系学部志望者と、表7の理学・農学系, 工学系志望者との教科別成績を比較すれば、より明らかになる。3年生10月時点, 国公立大学出願時ともに、理系コース在籍の経済系学部志望者は、理学・農学系, 工学系志望者に比べ、社会, 外国語の成績にそれ程の差はないが、数学, 理科, 国語の成績は大きく下回っている。とくに、国公立大学出願時には、理科の成績の差は極めて大きい。なお、表6の文系コース在籍の経済系学部志望者と、表7の文科系学部志望者との教科別成績には、大きな差はみられない。
- (15) 個々の生徒の学力パターンの分類指標の一つとして、例えば「学力型」がある。この「学力型」を用いて、志望学部との関連についても分析を行った。しかし、各生徒の「学力型」は4サンプル時点を通して変動の程度が大きすぎることが判明した。従って、今回はこれに関する分析結果は割愛した。なお、本稿と同じデータについて、この「学力型」を中心にした研究としては①参照。学力型一般、およびそれを別のデータに用いた分析については、②~④の文献参照。
- ① 前掲, 池田・山村・岩田。
- ② 前掲, 岩坪・池田・岩田。
- ③ 前掲, 山田。
- ④ 山田文康・山村 滋「受験者と合格者の学力特性に関する学力型に基づく分析」, 『大学入試フォーラム』No. 12, 1991 年, PP. 41-42.

- (16) 「学力型」といった学力パターンの一指標をもとに、全国の国公立大学志願者の志望学部系統を分析した結果によれば、理系学部と文系学部の志望を分けるキー教科は、理科であることが指摘されている（前掲、岩坪・池田・岩田、P. 121）。また、先に示した山田の知見をもとにすれば、国公立大学志願者の一般的な傾向としては、数学と理科のセット、国語と社会のセットが、志望先大学の理系と文系を分ける教科になることが示唆される。従って、以上いずれの知見を採用するにしろ、文系－理系の志望先の分化を決定する教科は、数学－教科とはならないからである。

- (17)① 前掲、山田、PP. 34-38.

さらに、この知見に関する他の裏付けとしては、前掲、岩坪・池田・岩田論文の注参照（PP. 127-128）。そこで紹介している文献の中で、共通1次のデータをもとにした特に重要な研究として、下の文献を再掲しておく。

- ② 池田 央、「共通1次学力試験の教科・科目間の相関」、『大学入試フォーラム』No. 2, 1983年.

- (18) さらに注(20)も参照されたい。

- (19) かれらを国公立大学志願者とまとめて、共通1次受験者と共通1次非受験者といった分類で、以下と同じ分析を行ってみた。しかし、その2者間での偏差値の差が、いずれの教科についても幾分接近することを除けば、他の結果に変化はみられなかった。従って、共通1次は受験したが国公立大学に志願しなかった生徒は、国公立大学志願者と共通1次非受験者の、共通1次非受験者よりの中間に位置する集団と考えられる。

- (20) さらに図4からは、先述の共通1次全志願

者に対する山田の指摘とは異なるという意味で、A高校特有の学力における特徴がみてとれる。即ち、文系学部系統志願者では、国語、社会とともに外国語ではなく理科の学力が高い。理系学部系統志願者では、数学、理科について外国語ではなく、国語の学力が高い。つまり、A高校の生徒は一般的に外国語の学力が、全国の共通1次受験生と比べて相対的に低い。

- (21) ただし、国公立大学志願者と国公立大学非志願者の各教科偏差値の差を、文系志望一貫者と理系志望一貫者について比べると、以下の傾向がみられることを指摘しておく。文系志望一貫者におけるこの差は、理系志望一貫者の差と比べて、国語と社会、特に国語において小さく、数学と理科、特に数学において大きくなっている。（外国語に関しては、サンプル時点間で一定していない。）つまり、文系志望の国公立大学非志願者は、数学、理科、特に数学の勉強を幾分怠っている。理系志望の国公立大学非志願者は、国語、社会、特に国語の勉強を幾分怠っている傾向がみられる。しかし、全般的にみればこの差は、いくつかの教科を「捨て」ているというより、「手抜き」している程度と考えられる。

- (22)① 前掲、深谷昌志・深谷和子、PP. 136-140.

- ② 前掲、深谷昌志、PP. 192-194.

〈付記〉

本研究は、平成3年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(A))「多様な大学選択をもたらす大学評価に関する研究」の研究成果の一部である。